

芥川龍之介全集

第十三卷

芥川龍之介全集 第十二卷 第十二回配本(全十二卷)

一九七八年七月二十四日 發行◎

定價三八〇〇圓

著 者 芥川龍之介あぐたがわ りゆうのすけ

發行者 綠川 亨

發行所 〓加 東京都千代田區一ツ橋二丁目五
會社 岩波書店

電話 〇三・六五四二二
振替 東京六二六四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

雜纂

○ (野口眞造君硯北)	三
○ (眞ちゃん)	六
廿年後之戰爭	九
修學旅行の記	一七
龜夜讀書の記	一九
武士道	二一
猩々の養育院	二三
義仲論	二六
水の三日	六五
槍ヶ岳に登つた記	七二
日光小品	七六
レオナルド・ダ・ヴィンチの手記	八二

囁く者	八五
火と影との呪	九〇
人と死と	九四
暁	一〇三
明治	一〇七
〔題未定〕	一一三
絹帽子	一一六
遺書	一二四
東洲齋寫樂	一二七
Die Philosophierung über „Reigen“	一三一
天狗	一三五
寒山拾得	一四五
「Lies in Scarlet」の言	一四七

夢 幻	一五四	烈 女	二一九
尼と地藏	一五八	保吉の手帳から	二二四
寫生論	一六八	三つの指環	二三〇
かちかち山	一七二	サロメ	二三八
入社の辭	一七四	〔八寶飯〕	二四三
食人批評	一七六	冬 心	二四五
聖ジュリアン物語	一七八	女 親	二四九
雜 筆	一八〇	悲劇 皇帝と皇子と	二五九
未定稿（草稿）	一八四	〔アフオリズム〕	二六二
賣文問答	一九〇	〔芭蕉雜記〕	二六九
河内屋太兵衛の手紙	一九三	各種風骨帖の序	二八一
〔題未定〕	一九九	大導寺信輔の半生	二八二
〔ディイダラス〕	二〇一	美しい村	二八八
民	二〇三	文壇小言	二九一
孔 雀	二〇六	明治文藝に就いて	二九三
商賈聖母	二〇七	〔小説作法〕	二九六
天主の死	二〇八	凶	三〇二

瀧井君の作品に就いて	三〇四
鶴沼雜記	三〇七
〔斷片〕（ある嚔、唾）	三一〇
〔文藝的な、餘りに文藝的な〕	三一二
わが家の古玩	三一五
夢	三一七
〔題未定〕	三二六
織田信長と黒ん坊	三三〇
發掘	三三七
仙人	三四二
比呂志との問答	三四四
〔十本の針〕	三四五
犬養君に就いて	三四七
〔斷片〕（I—XIV）	三四九
*	
我鬼窟日録	三七五
澄江堂日録	三九三

〔輕井澤日記〕	三九六
*	
小説の讀み方	四〇一
短篇作家としてのポオ	四〇三
内容と形式	四一〇
ポオの一面	四一五
*	
芥川龍之介年譜	四二二
〔遺書〕（五通）	四二五
手帳	
椒圖志異	四三一
ノート斷簡	四六二
手帳（一一一二）	四六七
對談・座談	
芥川龍之介氏縱横談	五四九

女性改造談話會	五五四
新潮合評會(一)	五六〇
新潮合評會(二)	五六八
家庭に於ける	
文藝書の選擇に就いて	五七五
新潮合評會(三)	五八四
新潮合評會(四)	五八九
新潮合評會(五)	六〇三
芥川龍之介氏との一時間	六一二
新潮合評會(六)	六二一
女?	六三二
文章論	六三八
新潮合評會(七)	六四三
新潮合評會(八)	六四七
堺利彦・長谷川如是閑座談會	六六二
柳田國男・尾佐竹猛座談會	六六六
新潮合評會(九)	六七五

補遺

創刊號の歌に就て	六七九
新年の傑作は誰の何?	六八〇
私の好きなロマンス中の女性	六八一
桐	六八二
砂上遅日	六八三
書簡	六八四
墨陀の櫻	六八七

年譜	六八九
著作年表	六九七
後記	七一五
總目索引	七五四

雜

纂

野口眞造君硯北

○

僕がね 昨夜さらひをしながら不圖考へると面白くも押川の冒險談の想が浮たのだマア聞てくれ
一番始は何でも外國船の甲板で航海の無聊を慰め方々演藝會をひらく するとこの船に乗組でゐる東洋のカーネー
ギ野口眞造(をだてる理ではないが)と佛蘭西の海軍將校のドウエル大尉と云ふ奴とが一寸したことから爭論を始め
ドウエル大尉は暴力を振て野口眞造を打ふとする 此處へ丁度乗り合せた蠻勇俠客古川順之介が見兼ねて中に入り
一撃の元に蛙くひのフランス大尉を甲板にたゝきつけると云ふ之がマア芝居なら序幕だね それから船がだんく
進で支那海の近くに來かゝるとこの近所には海賊が横行すると云ふので一同戦々競々としてゐると果して一團の海
賊が船を乗りかけて一同劒戟をふりかざして切りこんでくる 之が二幕目だ こゝで双方必死になつて戦てゐる中
に海賊の首領の芥川龍之介(笑ひ給ふな)が自ら陣頭に立て散々にきりまくる そこで古川順之介との一騎打になつ
て殘念ながら首領は捕虜となり其他の海賊は散々にをひまくられ首領は艙中に投こまれる 三幕目は艙中の所で蠻
勇俠客はしきりに首領に善をすゝめる そこで首領は飄然として悟り互に生血をすゝつて兄弟の固めをなし共に或
る一大事業を企てる こゝへ野口眞造も來てその壯舉に賛し資金を出すところで幕だ

こゝは南洋の無人島で清水海軍大佐が潜航艇の發明を企てゐる　ところへ　古川と芥川とが漂流（何かわけがあつて）して共に大事を計ると云ふのが四幕目

すると場所が一變して五幕目は佛京巴理になる

巴里の料理屋だ　こゝの奥の間で佛探賣國奴立田川雄之介（其實芥川龍之介）同杉浦譽四郎（ちつと酷いが）の二人が佛國の將校ドウエル大尉と密談をしてゐる　それを隣室で日本理學士大島敏夫が聞いて悲憤の涙を吞むと云ふところで幕

六幕目は同セイヌ河畔で立田川と杉浦とが伴立て歸てくるのを大島敏夫が「天に代て賣國奴を誅す」と叫で一撃の元に短銃を以て立田川を射つ　杉浦と格闘して之を捕へる　こゝで立田川は「自分は本名を芥川と云て實は賣國奴に容て日探になつてゐたのである」と云ふ事を明す　大島は非常に自分の早計を後悔する　之に感激して杉浦は心を改め　日佛戰爭の動員令も近からうから本國に歸て天晴國家干城になると約する　芥川は微笑をもらして天空漸紅ならんとする頃空を仰で死す　二人は泣いて之を葬ふところで幕だ　こゝが見せ場さゝマア

こゝは佛領サイゴンの激戦で銃聲砲聲交々響く中に日本の抜刀隊が突入し杉浦軍曹は一番乗の功名をして負傷するところへ空中からは大島理學士の發明に係る空中軍艦が出現して砲撃を加へサイゴン陥落で幕

次は臺灣の假病院で杉浦が病床で呻吟してゐるこゝへ軍醫吉田春夫出て　杉浦君かと不思議の會合に驚く杉浦後事を吉田に託し萬歳を唱へて死する件で幕　アゝくたびれた　少しやすまう

今度は佛京巴里郊外で一寸日佛兵の戦ひを見せ道具が廻ると佛軍の軍營で寒月一輪空中にかゝつてゐる夜景となる　こゝへ一人の覆面の男が忍びこんで短刀をふるつて番兵をきりたはし覆面をとる豈計らんや古川順之介である　火藥庫に火して燃へ上るのを見て立ち去る件で幕だ

今度は佛國マルセイユの港で正に夜色沈々たる頃 清水大佐の潜行艇が水雷をとばして佛艦を沈める そのとたん
だ 巴里の方にあたつて猛火天を焦がすを見ると云ふところで幕
こゝは平和克復のところで場所は青山の芥川及杉浦の墓地(鶴龜! 鶴龜!)で野口古川清水大島吉田いづれも詣り出
會して往事を語るところで目出たく

打ち出し

返事には批評をして下れ給へ

君の柔順なる 芥川龍之介

(小學生時代)



眞ちゃんに

ボロバウメエウスボロータム

眞ちゃん 冗談ぢやアないぜ 人を哲學士だなんてその上我敬愛する文界の魔王バイロンを佛國レデーに比するなんて 酷いよ しかし脚本はうまいね 未來の益田太郎冠者は君だよ 僕がその後を一寸

序幕 野口邸内

こゝは橋町野口眞造邸内の體なり主人眞造はある一大事業を企てそれが爲資金に迫り高利貸^{アイス}の金を借りし爲アイス大勢をしかけ返金をせまり〔二字不明〕執達吏來て財産差押となり折角企てし大事業も之が爲にゼロとなる眞造^{アハ}憤慨腕を撫する件にて幕

二幕目 秩父山中

眞造失望のあまり旅行を企て無錢のまゝ山に臥し野に寝ねてこゝ秩父山中に至る 山に山賊あり 長は秋永國造と云ひ元薩藩士たり 眞造山路に至るに及びて之を捕へ旅金を出せと迫る眞造依然「己は死にに來たのぢや早くころせよ」と敢て動ぜず秋永その剛膽に感じ山塞に伴ふ

三幕目 東京帝國ホテル

こゝに社會黨の大會を開く 首領覆面王(エヘン)一世の女丈夫ローズ嬢と共に出席し其他天下の傑士雲の如く集る
こゝに無法なる警官侵入して大會を禁止す黨員不諾 こゝに格闘を生じこの模様よろしく幕

四幕目 武州大宮公園

大宮公園の秋景 こゝに傑士岡本與四郎從僕仁藏をつれて出来る折から一世の名畫家棚橋音丸畫板カンパス杯よろ
しくスケッチ行の途中の體にて出で來り博徒白馬滿(事淺井滿)と衝突し口論となる 與四郎入て白馬をこらす こ
ゝに上手秋草中より覆面王ローズ夫人半身を現し與四郎の行爲を見る體にて幕

五幕目 吉田衛生試験所

こゝは吉田醫學博士の試験所なり

吉田博士助手と共に試験をつゞける こゝへローズ夫人來り密書を渡す吉田一見して直に齋藤陸軍大佐(御存知
の赤い面)を呼び三人額を合てある有力なる爆發彈の發見に碎身すこの模様よろしく幕

六 秩父山中

爆發彈略々なりこの試験所を設る爲覆面王ローズ夫人齋藤大佐吉田博士等秩父山中にわけ入る 折柄旅行中の岡本
棚橋に會し二人とも黨の一員となる こゝに銃聲ひびく一同驚きその方に向ふ 所へ上手熊笹の中より山賊の首
領秋永國造出で相互相談し秋永又黨員となる件にて幕

七幕目 同山寨

一同山寨に來り野口を説く野口きかず己は死ぬ工夫をしてゐるのぢやと云ふ覆面王然らば黨の爲に死せと遂に野口
又一員となる件にて幕(入黨がちとつゞくけれど)

八幕目 佛國ダッシー砲臺

すべて佛國ダッシー砲臺の體 棚橋音丸秘密地圖を製作中佛兵に怪まれ捕へられんとすこゝへ蠻勇俠客麻生福次郎來て之を救く

九幕目 社會黨萬歲

日本社會黨の一團空中飛行艇に駕して一種強力なる爆裂彈をとばして全歐州の大都會を悉く破壊する件で幕

社會黨員の目標

覆面王 R A 生 野口眞造

吉田春夫 齋藤秀郷 秋永國造

岡本與四郎 棚橋音丸 麻生福二

即女丈夫 Rose 夫人

以上

R A 生

(小學生時代)

廿年後之戰爭

一 霹靂一聲

一九二六年四月二十日水曜日の朝端しなくも東京に發表せられしロイテル電報は政治社會及商業社會に少なからぬ畏懼と激動とを與へぬ。報は火曜日の夜日本領瓜哇發にて其文左の如し

今午後の事也昨朝當港に碇泊せる佛國東洋艦隊に屬せる一水兵は我太平洋艦隊なる香取の一水兵と珈琲店に於て爭論を引き起し其場に居合せたる日佛兩國の水兵は各々其味方をなし果は双方打擲に及び剩へ其處に掲げられし御神影は微塵にうち毀たれ簷頭に樹立せられし日本國旗は散々に寸斷されぬ

佛國の水兵は遂に街路に押出され後には端艇迄追ひやられたり。聞くところによれば佛兵は小銃を發射せし由にて佛國方には二三名の死者さへ出せし趣なりされど當地の人心の激昂せると警官の非常なる沈黙を守れると四邊に嚴重なる非常線の張られたるとによりて毫も信すべき確報に接せず。我香取艦長は直に佛國の旗艦ジャンヌ號を訪へり。其の目的は事の説明を求めん爲なるべく或は説明を與ふる爲なりとも云ふ。其再び上陸したる後も一の公報を發せざれば精確なる事情は更に知れず。事の形勢は重大と云ふ程には非るも何時重大に變ずるや知る可からず佛國東洋艦隊司令官は今やサイゴンと電信の往復頻繁なり（四月十九日瓜哇ホノル、港發電）此の驚くべき飛電に次で更に更に驚くべき事件は吾人の最信頼せる時事日報に依て傳へられたり。曰く

ホノル、發 昨朝五時を過る頃戰闘艦三隻裝甲巡洋艦十一隻及其他若干の水雷艇並に水雷驅逐艇よりなる佛國東洋艦隊は急に當港を拔錨せり之と同時に我太平洋洋艦隊も又港外に進めり 是等の運動の目的は更に知れざるを以て驚くべき流言百出し當地は今混亂を極めをれり

ホノル、騷擾の報傳ると共に東京又騷擾の巷となれり 號外電信は亂雲の如く東西南北に飛び市民は都下各所の新聞社前に群集して數分毎に張出さるべき揭示を見んとひしめきあへり 一日過ぎ二日過ぎぬ 新聞紙上の聲は益々高まりて果は此爲に發行停止の災を蒙りしものさへ出來ぬ 市民は比較的穩にして只二三の暴漢の佛國公使館外に暴言放ち瓦礫を飛して其玻璃窓を破りしのみ然れども政談演說會は殆絶間なく開かれ愛國的演說の大道に行はるゝもの亦多數を極めたり 突如にして中央新報號外を放て曰く

○佛國裝甲巡洋艦モンカラム號上海に入り臺灣附近を測量しつつあり(上海電報)

○佛國地中海艦隊亞丁附近にあり(同上)

○佛國陸兵三萬サイゴンに輸送さる(同上)

○サイゴン。アンビン。間の海底電線は全く切斷せられたり(サイゴン特派員發)

此三四日來飛電の驚くべきもの續々として來れり其重大なるものを上れば

水曜日午後オステンド發 佛國駐劄日本公使は急に當地に着したり彼は昨夜睡眠中二時間内に巴里を引拂ふべき訓令に接し守兵に擁せられてベルギーの國境をこへそれより特派の汽船にて英國に向て發したり

風説によれば佛國東洋艦隊は昨日爭鬪中日本水兵の爲に殺傷せられし被害に對し十分の要償を得る迄は日本太平洋艦隊の出發を防壓すべき訓令を受けて日本艦隊の解纜と共に港外に出でたりと云ふ 危機正に迫れり 日本公使の引拂は明に平和の破れしを證するもの也